

明治神宮鎮座八十年を寿ぎて

國學院大學文学部教授

中西正幸

一、明治神宮記録

ただいまご鄭重なご紹介をいただきました中西でございます。明治神宮が御鎮座になられまして、本年秋、ちょうど八十年を迎えるということで、本当に喜ばしい限りです。皆さま方のお手元の資料の冒頭に書かせていただきましたが、明治神宮の御鎮座は大正九年十一月一日のことでした。したがって月変われば、ご鎮座以来八十年というまことに意義深い年を迎えることになります。今月十八日、既に日本武道館におきまして八十年の記念大祭ならびに教育勅語渙発百十年ということで盛大な催しがありました。そして、八十年目にあたる十一月一日、御鎮座八十年大祭がいとも厳粛にとり行われることでしょう。さような喜びのなかで、この八十年を寿ぐ話をさせていただきますと、まことに身に余る光栄と存じております。

さて、先ほど外山宮司のご挨拶のなかに、本年の年明けから『明治神宮叢書』と題する明治神宮の関係資料、あるいは代表的な編著書を集めて、前後七年を要すると思いますが、二十巻という膨大な叢書刊行が開始されました。この十一月一日、あたかも第三回目の配本がなされる運びとなっております。想えば今から二年前でしたか、編纂業務

のため専門委員を委嘱され、どのような内容編成にするか、あれこれと苦慮してきました。世の中に公にされている編著書についても、どれが代表的なものか、甲論乙駁いろいろありました。しかしながら、いちばん重要なことは、鎮座に関わる神宮根本資料で、できれば未公開のものがあれば、叢書編纂の上から大きな意味づけができるということとで、神宮内の各所を探させていただきました。

社務所に架蔵されている書物、また絵画館の地下にある所蔵資料など、いろいろ当りました。結局は職員の方によくやく見つけていただいたのが、宝物殿の東の収蔵庫内に、宝物となっている根本資料がありました。あの収蔵庫の薄暗いなかで初めて、今日お話しする『明治神宮記録』をはじめとして、『明治神宮明細帳』、『明治神宮祭典記録』という三つの貴重本の箱が見つかったときは、本当に感激のあまり涙したというのも決して過言ではございません。この本を初めて神宮外に出すことについて大所高所のご検討をいただき、最終的には外山宮司の英断によって、これを原本そのままの写真版として公刊することになりました。鎮座八十年を意義づける叢書の、しかも第一回の配本として本年頭、『明治神宮記録』が影印版ということで、随所に加えられている朱筆も鮮やかに完全復元できたことは、まこと慶びに堪えないところであります。

さらに第二点は、その叢書のなかで本年十一月一日に配本予定となっております図録編。それに収載される『明治神宮鎮座絵詞』は、のちほどスライドで見させていただきますが、御鎮座にかかわる絵図と詞書を織り込んだ雅趣あふれる五巻の卷子本で、この十一月一日に原色さながら刊行されます。

さような刊行事業に携わっている立場上、御鎮座八十年を寿ぐという趣意をこめて、『明治神宮記録』にみる創建当初のありさまを窺ってみたいと存じます。ただ時間の関係もありますので、八十年前の大正九年十月、十一月といわずか二か月ほどの話に限定せざるを得ません。社務所の仮設からやがて軌道に乗り、ご鎮齋、さらに初めての鎮座から天皇御親拝、そのあたりをクライマックスとしてお話ししたいと考えております。

二、造営局と社務所

『明治神宮記録』は大正九年十月八日に筆が起こされていますが、記録を辿る前に、先ほど極彩色の絵巻である『明治神宮鎮座絵詞』のことを申し上げましたので、それ以前ことは絵詞で補うことにいたします。この七十万坪米といわれる鎮座地そのものは元南豊島御料地にあたり、明治天皇の御製「うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこここそすれ」さながら、大正三年四月に決定されました。昭憲皇太后が崩御なさるのもちょうどこの時期です。それから、ご祭神として明治天皇とあわせてお祀りし、ともども二柱としてご祭神にしようと決定の運びになりました。それから、その御料地は全国の青年たち、若人たちが勤勞奉仕し、あるいは全国各地からの前後二十万本におよぶ献木を植えることにより、いまに鬱蒼たる森林を呈しております代々木の神奈備が造成されました。話の中にはいちいふれられない陰の努力については、すでに御造営記録の中で公にされているところです。

この前後六年間を要するご鎮座までのいろいろな努力のなかで、ようやく四年四月に一般でいわれる地鎮祭が行われました。さらに翌年三月には**鉦始祭**があり、宮大工が木口を伐り墨繩を打ちました。およそ四年間ほどの歳月を費して基礎工事が終わり、造営工事の本格化を告げる立柱祭がやっと八年五月に執行されたのです。さらに同年七月、千歳棟・万歳棟の諸声も勇ましく棟木が奉揚され、壮麗な神殿の佇まいが人々の目の前に現われました。神殿造営きわめて順調、それが本日申し上げる『明治神宮記録』にさきだつ部分であります。

社務所が編纂した『明治神宮記録』は大正九年十月八日から筆が起こされ、ここを起点として公的記録のあらましを辿って参りたいと思います。そこで筆が起こされた八日とは何なのか。目睫の間に迫った御鎮座の盛儀をひかえて明治神宮のトップである宮司、ナンバーツ一の権宮司が内閣から正式に任命され、ここから社務所記録の筆が起こつ

て当然です。海軍大佐の一条実輝を宮司に任じ、実務を担当すべき権宮司に、熱田神社の権宮司をつとめる鈴木松太郎を呼び寄せるというものでした。

この明治神宮の格式、あるいはアウトラインが決まるまでには、明治神宮は明治天皇さまをお祀りするから、官幣大々社にしようという一つの案がありました。官幣大社というと、すでに皆さま方ご承知の鹿島神宮とか熱田神宮とか、神社の格式では伊勢神宮はともかく最高のランクです。けれども一つ上のランク、それが官幣大々社ということです。最終的には大々社にはならず、官幣大社で止まりましたが、明治天皇を景仰してやまない人々によって、さような熱誠あふれる時代気運のなかで討議された。

したがって明治神宮のご神前、日々の社務を担当すべき人物を熱田神宮から迎えるというのは、官幣大社として明治神宮と同格、神社においては最高の格式をもつお宮への配慮がそこに生きています。しかも、この鈴木権宮司は明治神宮の権宮司を振り出しとして、最終的には京都の伏見稲荷の宮司となり、昭和三十年に亡くなられた経歴の方で、まさに斯界有為の人材を得たこととなります。権宮司だけではなくて、その下に携わる大木清人禰宜、それから藪内友次郎主典も熱田神宮より抜擢しましたから、当初における人事構成は、熱田神宮からの人材援助をもってほぼ大筋が固められたというのが、記録を読んでつよく感ずるところです。

宮司任命からわずか五日たった十三日、明治神宮としては当初の社務所、つまり神社の業務を取り扱う事務所を内務省に仮置きした、と記録にみえます。内務省内の一室に仮事務所を開設、その入口に「明治神宮仮社務所」の標札が初めて掲げられました。しかも、まだ業務は緒についておらず、机とか椅子とかを、省内いろいろな所から借用してきて、とりあえず間に合わせる。あるいは、切迫している新殿祭用の装束などは、予算もまだ措置がついておりませんので、とりあえず宮司・権宮司をはじめとする職員が一時的に立替払いするなど、細かい記述もあります。明治神宮が産声をあげたのが内務省内の一室であり、当初は慌しい諸準備のなかで大変であつたらうと思つてころです。

そして、十四日の記録では、明治神宮で今後いかなるお祭りを行っていくかという祭典表を初めて編成され、記念祭の日取りを創立が沙汰された五月一日か、あるいは十一月一日の鎮座祭当日とすべきか討議された。最終的には鎮座記念祭として、祭典中に加えることになったと記録のなかに書かれております。二十日には内務省内の仮社務所を引き払い、代々木の宮域に移転。二十五日には伏見・梨本・東久邇・北白川等の宮殿下が台覧、社殿を案内しました。そして二十七日です。月替われれば、十一月一日の鎮座祭があるわけで、その直前に当ります。先ほど申し上げた宮司・権宮司・禰宜等も含めて、雇に至るまで顔ぶれが揃い、鎮座祭を控えて、直前にようやく全体陣容が固められたと、記録を読んでいて、さながら鮮やかな驚きを感じるところです。同時に二十七日任命の主典の中に藪内友治郎という名前が出てきます。熱田神宮から招き寄せた財務担当の主典として、この人が中心となって東京府に追加予算書を提出しました。当年度というと、ご鎮座を前後するわずか三か月ですけれども、十七万円余りの経費をもってとり賭うという大筋が決まっていく。それが二十七日ということで、見落とせない大事な点ではなからうかと思っております。

それから、社殿を建てる中心部局が造営局であり、既に四年四月に官制が布かれておりました。その造営局から本殿以下の出入りにもなう御鑰を十本、神宮側が引き継ぎを受けたという記録は、まことに重いものだと思っております。もちろん宮大工が御殿を建てますが、その完成を告げる意味で鍵が渡されると、ご本殿以下が神主、あるいは明治神宮側の責任下に置かれたということです。明治神宮としてお考えになるときに、二十七日という日取りは非常に大事なものである。そして、造営局は明治神宮に御殿以下を引き継いだから、そこで業務終了というかたちになるのが普通なのですが、十月八日から始まった人事、あるいは事務所設置、そして予算請求などの状況からみれば、すぐに本調子になるというものもなかなかできません。したがって社殿造営と関連祭儀をややリードするかたちで、造営局は十一月二日まで実際に関与し、同月三日以降の祭りを社務所担当ということで、正式に引き継ぎました。で

すから、造営局は御殿をつくるだけではなくて、かねて地鎮祭・立柱祭・上棟祭などのお祭りも造営部局のほうで進められてきました。造営局から社務所への神殿の引き継ぎ時点ということからいって、二十七日の記録は非常に重いものだと読ませていただいたところです。

しかも、造営局の総裁は伏見宮貞愛親王殿下、副総裁は床次竹二郎、さらに塚本局長と続きますが、あとのスタッフがすごい。評議員に三上参次、参与に建築家として有名な伊東忠太。それから、この代々木の森の植林ならびに林相遷移、天然更新により森のかたちがどんどん成長して、変わっていくという壮大なプランをたてた本多静六も名を連ねております。そして、私も神道の立場からいけば、考証学に名のある宮地直一、あるいは池田宏、大江新太郎という錚々たる名前を連ねており、明治神宮の基礎を固め、ならし運転として走り出すまで、かような方々が直接、間接の関与があつた訳で、造営局の人材の豊富さということに非常に大きな力を感じます。十月を足早に申し上げて恐縮ですが、そういうのが社務所の記録として特筆すべき事項であろうかと考えております。

三、鎮座祭

いよいよ待望の十一月一日。鎮座祭の様子を詳しく窺いたいのですが、時間が限られておりますので、二、三の話に限定して進めさせていただきます。

午前六時半ごろから早くも大礼服・燕尾服の文官・武官が参列席に入り始め、八時過ぎから床次造営局副総裁以下の造営局奉仕員、あるいは原総理大臣、阿部東京府知事が着席。ほどなく一条宮司以下の神職や伏見宮総裁が進み、そして九条勅使と御霊代、いわゆるご神体を納めた辛櫃が本殿に進み、一条宮司以下のご奉仕で最も奥深くの内陣に神霊が安置されるや、献饌、宮司祝詞、幣物供進、勅使の祭文奏上、玉串奉奠と続きました。

そして、内院や廻廊に東宮御所や各宮家からの鏡餅など、献備品が所狭しと並べられました。正午から一般参拝が許され、たくさんの方が鎮座をことほぎ代々木の森を埋めたのは当然ですが、国内はもとより海外同胞ということでも樺太、朝鮮、台湾等々、海外からの参拝者も含めて代々木の森は終日、雑踏で埋め尽くされました。『東京朝日新聞』によれば、「鎮座祭の人数五十万」と見出しがあり、境内もびっしり埋まったと報じられています。明治天皇・昭憲皇太后のご神徳を仰ぐ国民の気持から、ご社頭に澎湃として怒濤のごとく寄せたのは、まことに感激のきわみであります。

明治神宮では、あらかじめ慎重な人出対策を講ずるいとまもなく鎮座祭を迎えられ、拜殿から見ると南と東と西に三門ありますが、その出入口の区別もつけられない状況で、名状すべからざる雑踏と混乱をきわめました。これが後の例祭では、社頭前における参拝者の渋滞を起こさない配慮というものがより徹底されますが、鎮座祭は本当に喜びのために神前が混乱のきわみになったのも無理からぬことでした。警視庁から警官千五百名、ならびに青山師範学校と記録にみえますから、学校に頼んで学生がその規制にあたる。あるいは遠く三重県は伊勢市、神宮皇学館の学生をして社務所の助勤に従わせるなど、色々の手配りがなされておりました。しかし予想外の混雑ぶりであったということ、およそ読み取ることができません。

神宮ご鎮座の喜びということで十一月一日は全国的にお休みになり、津々浦々でご鎮座の慶びをこめて、ご神前をはるかにおろがむ遥拝式がとり行われ、国民こぞって祝意を捧げました。その感激の時代、大正九年という年は国民あげて赤誠を代々木の森に捧げることができた。そういう国民精神の最も健全なうるわしい姿を、きわめて印象深く受け止めるところで。

一条宮司が奏上した鎮座祭祀詞を読んでみますと、「掛まくも畏き明治神宮の大前に」と申し上げて、「大神等の高く尊き大御徳を慕奉り仰奉りて、弥遠永に斎き奉らむ」と続いています。この代々木の森明治神宮は、明治天皇・昭

憲皇太后という二柱の神靈が、明治の盛代において示された雄偉なお働きのまにまに、永遠に私も国民がふかく心に銘記して神靈をおろがみ祭するため、この代々木の宮は鎮祭された。宮司の祝詞文に明言された神宮鎮祭の理由は、この文章にきわまっております。

さらに『明治神宮記録』の十一月一日条に、結びの言葉として「此の今日の吉き日に、国民の追慕一日として止まざる我が明治天皇・昭憲皇太后二柱の大神は、新しき国の護と仰がれ給ひて、永久に安けく此の代々木の大宮に鎮座すこととはなりぬ」とみえます。明治神宮当局として、滞りなくやつと鎮座祭をご奉仕申し上げたという安堵の思い、深々としたものが結びの文章に溢れております。

あるいは既に言及しましたが、「鎮座祭の人数五十万」ということで、『東京朝日新聞』によれば「明治天皇・昭憲皇太后の御霊代を奉遷して崇厳の御儀を挙げ、全市を飾る玉燈の影、軒より軒へ彩旗ごとごとく万戸を埋め、参拝の群衆は御苑を埋めて、雑踏混乱、名状すべからず」と活況を呈しています。喜びのきわみのなかで人々は、手の舞い足の踏む所を知らずという状況が、新聞紙上でも報じられているのが、とくに印象に残るところです。

四、初度の行幸啓

この鎮座祭の翌日、午前九時過ぎに御名代が参拝されました。ご名代は東宮殿下、後の昭和天皇のことで、大正天皇になり代わるかたちで、ご鎮座翌日に親しくご参拝になられたというのが、二つめに重要な点であるうと思っております。

ただ、『明治神宮記録』をずっと辿っていくと、見過ごしがたい一つの記述があります。「東京府内務部長より宮司宛にて、来る二日皇后陛下御参拝の取止めの件、同日天皇陛下御名代として皇太子殿下御参拝の件、三日例祭日に勅

使参向の件通牒」という記録が、十月三十一日条に出てまいります。さすれば二日のご名代による参宮は天皇のご名代ではあるけれども、当初は皇后陛下がご参拝の予定であり、その皇后陛下のご参拝が取りやめというかたちで、皇太子のご名代参拝になったという、入り組んだ事情があるということは、いま読んでのとおりです。

ご了解のとおり、大正天皇は蒲柳の質でお生まれになられた関係もあり、大正九年ごろから健康がすぐれず、政務をおとりになるのが困難でした。しかも翌年ですけれども、十年の十月四日に宮内省から重大な発表があり、翌月二十五日、皇室会議の議を経て御年二十一歳の昭和天皇、つまり皇太子さまが摂政となられました。その一年前の状況ですから、あるいは天皇にご健康の問題があり、皇后さまもそれに関連してお取止めということで、東宮のご名代お出ましというかたちで参拝が実現したものと了解しております。鎮座祭翌日におけるご名代参拝の運びについて、さような事情が伏在していたと受け止めることができます。

さらに、二日の記録のなかで、「皇族・王族は本殿石階下に止立、御名代は同木階下の浜床上に進まれた」と書いてあります。今日、明治神宮で正式参拝をさせていただきますと、ご本殿の階段のすぐ近くまで進ませていただく。あの木の階段をすこし下りますと、今度は石段になりますから、本当に身に余る光栄なことです。東宮は石階を上られ、木階の手前にあたる浜床へと進まれる。天皇陛下・皇后陛下がご参拝になるときには、お浜床と申しまして、だいたい二十センチぐらいの壇を設け、それを白布で包んで、さらに外側を真菰で包む。その壇上にお立ちになります。玉串を捧げて礼拝なさるといのが宮中のご作法です。しかも、このときのご装束は洋装ですから、浜床を利用したご拝礼をなさったのでしよう。そして、これは東宮の場合ですから、一条宮司の進める玉串を直接にお取りになり拝礼、終われば宮司が階段上の小さな机に玉串をお供えすることになります。なお十日後の十一日、改めて天皇陛下がご参拝になりますが、同様に浜床の上にお立ちになってご拝礼なさいました。ただ、玉串の受け渡しは宮司から侍従、侍従から陛下というかたちで、東宮よりはすこし煩雑になるという奉仕上の違いがあり、玉串授受についてと

くに念頭においておかなければなりません。

二日のご名代参拝が滞りなく済みますと、その翌日は三日ということで、明治神宮の例祭日です。「永遠に最も意義ある国家的・国民的な大記念日」と讃えられる初度の例祭は、この大正九年十一月三日に斎行されました。初めての例祭が行われるということで、記録の中にも力強く、しかも分量において他日より非常に多く書かれております。阿部東京府知事以下が拝殿に進むや、勅使として河鱗掌典が参向し、御儀滞りなくご奉仕申し上げました。

明治天皇のご生誕日が十一月三日です。その天長の佳節をもって明治神宮の例祭日とする、まことに意義ぶかく永遠に忘れがたい設定になっており、それが一点です。「忘れんとしても忘れ難き日、如何にしても此の吉き日を記念し奉らんとは、誰も誰もの願なりき。聖旨畏くも遂に此の日を以て、当神宮の例祭日と定め給ひ、勅使を御差遣。御幣物を奠めさせ給ふこととはなれり」ということで、十一月三日の意義あるところを明言しています。

もう一点は、先ほど少し触れましたけれども、昨二日までの祭典は造営局の手によって執行されました。ところが、この初めての例祭日から神宮当局における責任のもとに祭儀の大任を果たし、『明治神宮記録』にはきわめて画期的なことと書いてあります。「昨二日迄の祭典は、造営局の手によりて行はれたるが、今日の例祭よりは社務所が主として、之に当ることとなる」ということです。造営局との関係においていえば、先月十月下旬に御殿引き渡しが始まり、十一月二日をもって造営局主導型の祭典はすべて終わり、明治神宮社務所が主導する祭典は十一月三日の例祭から始まるという区切りかたは、まことに重大なる意味を持っていると思っております。

およそ神社の祭典には一のものつく祭日を選ばれることが多く、一日、十一日、二十一日と三旬の初日をもって設定されます。天皇陛下のご参拝が十一日であることは、中旬の初日ということできわめて妥当なところであろうと思えます。陛下には初めての神宮ご参拝ということです。『明治神宮鎮座絵詞』第二十六、聖上御参拝には「をりしも降りしきる細雨は、林苑より神殿のあたりまで、さながらに洗い清めてひとしほの神々しさを増し、御垣の内に敷きつめ

られたる玉砂利はいよいよ白く、木々の紅葉も色を染めて、現御神の初度の行幸を待ちがほなり」と、凜とした行幸を待ちうける神苑を描いています。十一日のところで大事なことは、ご参拝の位置はどこかで、御拝礼位置が木階下の浜床上でした。それから玉串を捧げて拝礼ということならば、玉串が宮司から侍従・聖上へと伝進されており、ご名代の東宮のときより、さらに鄭重なるご参拝のなされようです。

次いで資料として掲げた宮司祝詞の中で、総括的な意味合いが述べられています。「二柱尊の高く広き大稜威を仰奉り慕奉る念一日として止むこと無く、大宮地定まりてより六年が間、其道々の人等、夜と無く日と無く勤み仕奉りて、此の大御殿も悉に作畢へ」ということです。六年間の歳月をかけて人々の真心を結集し、ようやく明治神宮の宮居を構えることができた。「六年が間」というのは、まことに感無量なものがあります。この代々木の森の造成、さらに流造として壮麗なる御殿、それを造築する造営の担当者。そして社務所内の人的構成を整えながら、わずか一か月に満たない産声を上げている時期。こうした六年間を回顧しての宮司祝詞には、深々とした思いがこめられていると、私どもの痛感するところです。

しかも、天皇のことに關して申し上げるならば、今日、天皇のご参拝をいただいたことに対して、本当にありがたいし、陛下がかくまで大孝の誠を申べ、敬神の実を国民に示されたというのが、ご参拝の意義としてとくに強く強調しているところです。悠久のかなた、神武天皇が即位礼を終えさせられた三年後、天神を大和橿原の郊外にお祭りした鳥見山の靈時のことを、「大孝を申ぶ」という言葉を使います。先祖に対してその心を体し、国づくり、社会づくりに励むという敬神崇祖の思い入れというのは、まさに国民にとって敬神生活のモデルをお示しいただいた。それが明治神宮のご鎮祭であり、十一月十一日の天皇のご参拝であると意義づけた『明治神宮記録』の眼目とするところです。のちに坂本先生から教育勅語のお話もございましたが、まさに国民道徳の亀鑑が天皇の神宮ご参拝のなかに集約されているという『明治神宮記録』の一節は、読み落としたがたい重い意味を秘めていると私は受け止めています。

さらには『明治神宮鎮座絵詞』の中に書かれている文章として、いま申し上げたところが「国民上下も等しく、兩陛下がかくまでに大孝の誠を申べ、敬神の実を示させ給ふを見聞き奉りては、いとど忠愛の念に燃え孝貞の情を尽さむと、競はぬものこそなかりけれ」と書いてあります。このように「大孝の誠」を申べ、敬神の実を示された陛下のご参拝は、私ども国民にとつて神に対し、祖先に対すべき形姿として、示唆するところきわめて深いものがありました。

さらに飛んで恐縮ですが、十一月二十三日。これは今日もそうですが新嘗祭ということ、その年の秋の収穫を感謝し、神々とともに新穀を頂戴するお祭りです。この新嘗祭も、もちろん明治神宮としては初めての御儀齋行ですが、とくに二点ほど申し上げたいと思います。

五、御衣祭と新嘗祭

一点は、新嘗祭を齋行する前に、神さまのお召し物である夏の御料、冬の御料をお取り替える。その時期は立夏、立冬をもつて行うというのが、だいたい以後の慣例です。したがって十一月二十三日ならば、神様は冬装束を装っておられます。しかしながら一日の御鎮座祭、二日の御名代参拝、三日の例祭、あるいは十一日の天皇ご参拝、次いで十五日の皇后陛下ご参拝と、重大なことが続きました。傍らご社頭もはなはだ輻輳をきわめた状況のなかで、ついに二十三日まで御衣祭おんぞをご奉仕できなかつた。したがって、早朝に御衣祭を奉仕し、定刻に本年の新嘗祭を執行するというところで、一日のうちに大きな祭りを二つやることになりました。そういう状況が第一点です。

冬の御料は辛櫃五つの中に入って神庫というところに保管されていますから、神様の倉である神庫から辛櫃を出してきて、本殿も奥深い内陣ですから、いちばん神座に近いところに冬の御料をお納めする。そして、それまで納めら

れていた夏の御料を取り下げるといふかたちで祭儀が営まれました。しかも、このとき、造営局の技官である井上清が格別にご奉仕をしております。専門の技術者が指導的立場で、奥まった内陣の神座に近い所で祭儀の介添えをするという点は、記録を読んで特に注目しなければならぬ所だと思つています。一般神社ではそこまで行き届きかねますけれども、先ほど申し上げた、それぞれの道において一流の権威者である造営局のメンバーたちの英知を結集して齋行された明治神宮の諸々のお祭り。神御衣かんみそに関して言うならば、井上清の尽力で最初の御衣祭が滞りなく終つてゐるのは、安堵に似た気持ちで読んだ所です。

それから代々木の森の造成について、全国の若人が尊い力を結集しましたが、その若人たちが再度集まつたのがこの新嘗祭当日であるといふのも、もう一つの見落としがたい点です。非常にいい文章ですので、読ませていただきます。

明治神宮は、全国民至誠の結晶によりて成れるものなるが、就中青年団とは最も親密なる關係あり。抑々御造営工事開始の後、各地青年団員、先を争ひて勞力奉仕に預らむことを冀ひ、又鎮座当日、東京はもとより全国津々浦々の青年団員、献身的努力を捧げたるが如きは、恰く人の知るところなり。今や御造営も全く成り、二柱の神靈目出度鎮りましぬるを以て、内務・文部両省主催にて全国各都市青年団より代表者若名宛を選抜し、本日の佳辰に参拝せしむることとせり。

全国青年団といふことについては、新嘗祭当日、全国から各都市一名あて選抜した代表六千四百七名。膨大な数の青年たちが、かつてこの代々木の森で汗を流した感激を胸に秘めながら、初めての収穫祭に列して新嘗の喜びをご社頭に表しました。その六千四百という者たちは、全国にある青年団一万六千一団、団員は二百七十九万六千二百二十八名といふことですから、まさに全国の青年たちを名実ともに代表する若人が代々木の森、新嘗の祭り日に集い合つて、明治神宮を支える国民の力がここに結集している。読んでいて、まことに感激するところであります。

しかも動きはこれだけに止まりません。十二月十五日・十六日に群馬県佐波郡の連合青年団が二千七百名、この両日にわたって大挙参拝するという記録もあり、こうした事例を拾い上げれば数限りなくあるわけです。

明治天皇、昭憲皇太后のご神徳に対する全国民の気持を熱誠こめて捧げられたのが、いまから八十年前の大正九年十一月、月初めからの動きでありました。八十年を隔てたこの秋、十月から十一月にかけて、祖先を思い、国を思う気持が、いまは遠くはるかなセピア色なのか、あるいは息吹きをこめてもう一度われわれ国民の胸に呼び起こさなければならぬのか。時間がまいましたので、坂本先生の教育勅語をめぐって、そのあたりはお説きいただく筈です。国民道徳、国民精神が本来いかにあるべきか、その鑑となれば幸いということ、心から八十周年を寿ぐ小話とさせていただきます。

参考（講演資料の抜粋）

明治天皇は十六歳で大統を継ぎ、四十年にあまる在位を経て、明治四十五年七月に御不例、同月三十日に崩御された。翌年大正二年同月に一年祭が執行され、早くも十一月二十二日には神宮創建の御詔が下された。しかしながら三年四月、昭憲皇太后が図らずも身罷られる事態となり、八月十五日、一社に奉斎すべき勅詔をかさねて蒙った。

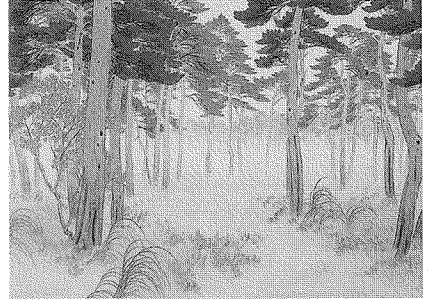


図1

〔図1〕(絵詞一、第一・御料地選定)

鎮座地をめぐって、さまざまに論議されたが、明治天皇の御製「うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのほかここちこそすれ」さながら、大正三年四月、元南豊島御料地(現在地)に決定した。



図2

〔図2〕(絵詞一、第二―四・地鎮祭)

四年四月、造営局官制(総裁・伏見宮貞愛親王殿下)を公布。十月七日に地鎮祭(雨儀)執行。その儀は官司以下・造営局副総裁以下(斎服)、工匠(素襖)がうち揃い、まず祭場の東北より四隅を祓い、次いで重女(汗疹)が草刈初・穿初・忌物奉埋を奉仕した。

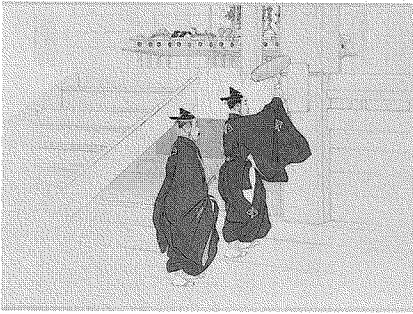


図 4

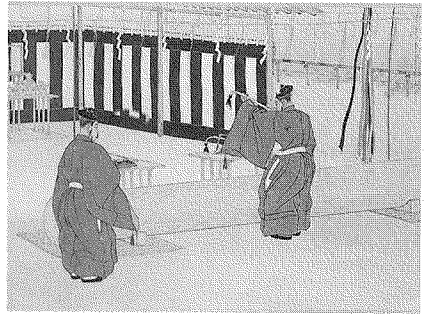


図 3

〔図 3〕(絵詞一、第五一六・新始祭)

木曾および台湾から用材が、次々に到着した五年三月二十五日、新始祭を執行。まず木工が、祭場に置かれた御木の木口を伐り墨縄を打ち、技師が検知。そして鉦をとり木造りすること三度、祭儀を終える。

〔図 4〕(絵詞一、第七・立柱祭)

基礎工事に足掛け四年を費やした八年五月二十七日、造営工事の本格化を告げる立柱祭を執行する運びとなった。技師の振榊と唯称に合わせて、木工四人が木槌で御柱を中央・南北・四隅と打ち固めた。

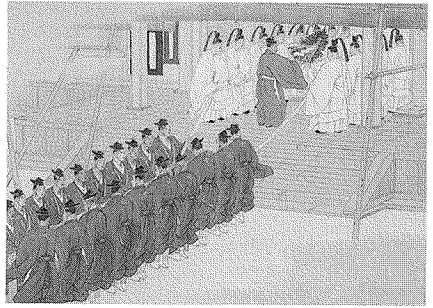


図5

〔図5〕（絵詞二、第八十・上棟祭）

八年七月十二日、本殿の屋根上に弓矢を飾り、さらに引綱を垂下し、博士木を拝殿・中門のあいだに打ち立てた。木工が「千歳棟・万歳棟」の諸声も勇ましく棟木を打ち固め、諸員が引綱を曳き、四隅に祝意をこめて餅・銭を撒いた。

○（大正九年）十月

八日 目睫の間に迫った御鎮座の大典を控えて、宮司・権宮司が任命された。

海軍大佐正二位勲二等功五級公爵

一条実輝

官幣大社明治神宮宮司被仰付

勅任官ヲ以テ待遇セラル

大正九年十月八日

官幣大社熱田神宮権宮司正六位

鈴木松太郎

官幣大社明治神宮権宮司被仰付

大正九年十月八日

内閣

〔明治神宮記録〕卷一、九月十八日

一二日 鈴木権宮司、東京府庁に就任挨拶、一条宮司邸において職員選定につき討議。

一三日 内務省内の一室を仮事務所とし、入口に「明治神宮仮社務所」の標札を掲げる。鈴木権宮司のもとに奉職希望の谷村頼尚・高木慶太郎・別所猶一がはじめて集い、事務開始。別所に出仕を発令。予算決算案・帳簿の作成方、机・椅子の購入手配方を協議。入用品は神社・造宮両局より借り入れるほか、急を要する新殿祭用の装束、事務用品の調達費用は職員が一時支弁することになった。

一四日 禰宜候補の大木清人、名古屋より早朝到着。一条宮司・鈴木権宮司・大木、代々木木工務所に向向。さらに宮域において宮地・荻野両参事に童女二人を加え、清祓式・新殿祭・鎮座祭に関して会合。権宮司、就任挨拶・新殿祭打合のため宮内省に出頭。事務上では文書收受簿を作製、印章（両宮司・社務所）篆刻を依頼。

〔本日、明治神宮祭典表を作る。記念祭の日取は大正四年五月一日、創立仰出されし日を探るべきか、十一月一日の鎮座祭の日を択ぶべきか。都合上よりは前者がよろしからんも、考証課と相談の上、後者と決し、鎮座記念祭として祭典中に加ふることなれり。〕

一六日 午前、造営局総裁・伏見宮殿下が工事検分のため代々木宮域に台臨。鈴木権宮司・大木出合。午後には内務省の判任官以

下三百名が社殿拝観。

一八日 鈴木権宮司は、主典候補の藪内友治郎（熱田神宮宮掌）が作成した当年予算書（総額七四、一一〇円）及び主典定員につき東京府庁に進達。

一九日 代々木宮域にて正親町権典侍以下の女官、中村宮内大臣、掌典、東宮侍従、山県公爵一行が社殿拝観。

二〇日 内務省内の仮社務所を引き払い、代々木宮域の社務所に移転。午後より電話開通。

二二日 報知新聞社が社殿を撮影。鎮座祭当日から数日間、神符・守札の授与につき助勤を神宮皇学館に依頼。宮殿下の御玉串用として紅白絹を購入。

二三日 本日付にて片岡常男・手塚道男・飯田秀真（囑託）・八木藤太郎（雇）拜命。東京朝日新聞社・東京日々新聞社、社殿を撮影。

二四日 竹内武雄（出仕）拜命。初めて岐阜・奈良両県民より神饌・初穂料の送付を受ける。

二四日 清祓式・新殿祭・鎮座祭の祭式など、宮地参事と打合せ。午後、伏見・山階・久邇・梨本・朝香・東久邇・閑院の各宮殿下・妃殿下が台臨。塚本造営局長の案内にて社殿を御覧になられる。大正日々新聞社・名古屋新聞社が社殿撮影。造営中の巡查派出を、鎮座後の翌年三月まで存置することに決定。

二五日 伏見・梨本・東久邇・北白川・竹田・東伏見の各宮殿下・妃殿下が台臨。塚本造営局長が社殿案内。神宝、装束類を憲法記念館に陳列、特別関係者に拝観許可する。鎮座祭が切迫したため、本日より夜勤。

二六日 皇太子殿下の御参拝につき東宮職侍従一行、打合せのため来宮。社務所の一室を造営局祭儀本部とし、正式参拝取扱を定める。絵葉書原版調製のため撮影実施。貫名栄太郎（囑託）拜命。

二七日 大木清人（禰宜）、谷村頼尚・高木慶太郎・藪内友治郎・片岡常男・手塚道男（主典）・清水親恵（雇）拜命。東京府に追加予算一〇〇一六二元（合計一七四、二六四円）を請求。本件は三十日に認可。

佐伯掌典・星野掌典補・雑仕、鎮座祭式の打合せ。一条宮司、職員一同に訓示。午後三時より職員と造営局（童女、梶やす子・春田衣重）、実地にて新殿祭習礼。また造営局より本殿以下の御鑰一〇本を引継ぎ、社務所および宿衛舎宿直を開始。

二八日 清祓式を、午前八時より十時半まで奉仕。造営局（宮地参事、本郷・志知・井上技師、小沢技手、押見囑託）、神宮（鈴木権宮司、大木禰宜、藪内主典）。床次副総裁以下、宮西日枝神社宮司、賀茂靖国神社宮司、新聞・通信記者など参列者数百名。

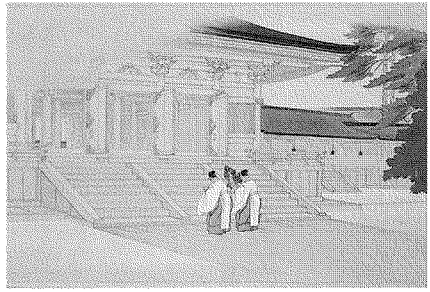


図 6

〔図6〕(絵詞三、第一一・清祓)

一年を経て神殿が竣工するや、大正九年十月二十八日に清祓式を挙行。本殿階下をはじめ中門・拝殿・南神門・第三鳥居・宮地など、つぎつぎと大麻・塩湯にて祓い清めた。

二十九日、御飾式、午前八時より午後四時まで奉仕。祭器庫に保管する神宝・装束類の辛櫃を旧御殿に運び、神宮(鈴木権宮司、大木彌宜、藪内主典)が修祓をつとめ、造営局(荻野・宮地両参事、井上技師、他に技手・雇員など十数名)が内外陣、中門、神饌所、便殿、拝殿、神門などを装飾。さらに鎮座祭の習礼。社務所発行の絵図・絵葉書の図柄を決定。

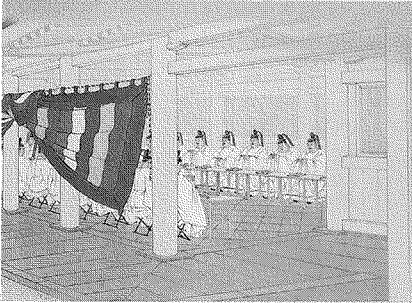


図 8

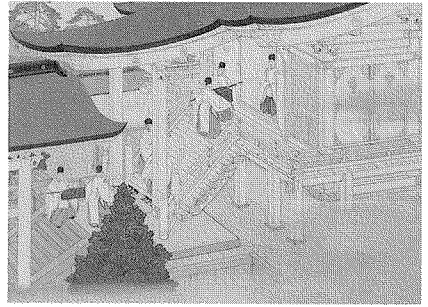


図 7

〔図 7〕(絵詞三、第一六・御飾)

本殿に神服・神鏡・神剣の神宝を納め、また拝殿以下、諸殿舎の御飾を烏帽子・狩衣姿にて奉仕。朝八時から午後四時に及んだという。

〔図 8〕(絵詞三、第二二一〜二一五・新殿祭)

式後、ひき続いて新殿祭に移り、まず齋主が本殿内陣の四隅に御富岐玉を飾り、米酒・切木綿にて祓い清める。次いで外陣(巽方)に向かい祝詞を奏上。童女が南神門において米酒で祓い清め、終われば諸員は直会殿に退き、めでたく白木の台盤にて「御箸申し」の直会に預かった。

三〇日 午後、皇族下乗礼を域内に立てる。鎮座祭式につき造宮局高等官と打合せ、全職員習礼。岡部稲荷神社宮司伏見・華頂両宮家など域内拝観。神宮神部署に奉製依頼した神符六十箱（一箱一、五〇〇体）を社務所に搬入。

三一日 早朝、宮内省より御馬車三台到着。午前十時より大木禰宜以下、鎮座祭習礼。正午より一条宮司以下、参籠に入る。東京府より①二日の皇后陛下御参拝取り止め、②同日の天皇陛下御名代（皇太子殿下）御参拝、③三日の例祭日に勅使参向、の三件につき通牒。また「明治神宮鎮座記念絵葉書」（印刷局内・朝陽会発行、一五、〇〇〇組）納品される。

〇 十一月

一日 午前六時半頃、早くも大礼服・燕尾服の文官・武官が参列席につきはじめ、八時過ぎに床次副総裁以下の造宮局奉仕員、原総理・阿部東京府知事、二十分に一条宮司以下の神職、伏見宮総裁がそれぞれ参進。次いで三十分に九条勅使・御霊代辛櫃が神前に進む。神霊が奉安されるや、勅使の遷霊祝詞、禰宜以下の献饌、宮司祝詞、幣物供進、勅使の祭文奏上。続いて伏見宮総裁・原総理・一条宮司・東郷参列員総代が玉串を捧げた。当日の景況は次のとおりであった。

- (a) 内院・廻廊を鏡餅（東宮御所、各宮家、総理大臣、國務大臣、宮内大臣など）、清酒（東京府知事、府議會議長、東京市長など）の献備品が埋め尽くした。
- (b) 十一時過ぎ、第二皇子の淳宮雍仁親王殿下（麻生第三連隊付）はじめ、第一・二・三艦隊、第一・近衛両師団が隊伍を整えて肅然と参拝した。
- (c) 一般参拝が許された正午より、「神徳敬仰の赤子」が神宮橋から南玉垣・鳥居を埋め尽くし、社頭まで群衆の氾濫するありさま。午後四時には雨天となったが、千数百の警官や市内青年団・青山師範学校生なども制止しかねる活況を呈した。殊に樺太・台湾・朝鮮から、遙々と海山を越えて上京した海外同胞もあった。その数、およそ五十万にのぼったという。将來、宿衛舎にて授与すべき神符・守札は、雑踏を慮って直会殿を仮授与所とした。拝受者が十重二十重とり困み、怒濤の如く満ち溢れ、あまりの事態に途中閉鎖のやむなきに至った。
- (d) 本日より三日間、境内の宝物殿前の広場や外苑において、様々な奉納行事が繰り広げられた。
- (e) (団体) 馬政局、主馬寮、大日本武徳会、大日本弓道会、弓道館、弘道弘徳会、東京競馬倶楽部、大日本相撲協会、近

衛騎兵連隊、弓馬會

(種目) 擊劍、柔道、大弓、馬術、相撲、競馬、流鏑馬、母衣引など

(f) 築地の精養軒では東京府奉祝会が催され、宮司・権宮司が招待された。

(g) 全国津々浦々では、鎮座祭にあたり業務を休んで、遥拝式が厳かに挙行された。

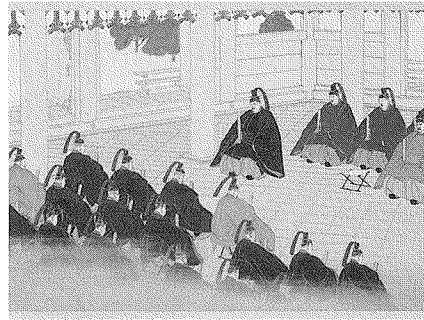


図 9

〔図9〕(絵詞四、第一七―二二・鎮座祭)

晴れ渡る待望の御鎮座当日を迎え、本殿・拝殿を装い中門に盾矛を列ね、鳥居に神飾りをするなど、諸準備も整った。八時、衣冠姿の副総裁以下の奉仕員が拝殿内に、大礼服の総理大臣以下が中門外の握舎に着くや、ほどなく総裁・伏見宮貞愛親王殿下、勅使・九条掌典長、辛櫃(大御霊代・御幣物)が参進。

まず宮司・権宮司が昇階して、内陣に伺候。勅使随員が辛櫃を外陣に進めると、伶人が奏楽するなか、宮司・権宮司が大御霊代を内陣の神座に謹んで奉安。宮司伺候のまま、勅使は外陣にて遷霊祭文を奏上し、宮司が祭文を大前に納めて復座。宮司反命の後、禰宜以下が神饌奉奠、宮司の祝詞奏上に続いて、勅使随員より御幣物を受けて大前に供進する。ふたたび勅使が祭文を奏上した。

「生を神国に亨くるもの、老いも若きも齊しく一日千秋の思ひにて待ちに待ちたる鎮座祭は来れり。国を挙げて欲び狂ふ此の今日の吉き日に、国民の追慕一日として止まざる、我が明治天皇・昭憲皇太后二柱の大神は、新しき国の護と仰がれ給ひて永久に安けく、此の代々木の大宮に鎮座すこととはなりぬ。」

― 鎮座祭

大正九年十一月一日

次禰宜以下、神饌ヲ供ス

次宮司祝詞ヲ奏ス

掛まくも畏き明治神宮の大前に宮司権宮大佐正二位勲二等功五級公爵一条実種恐み恐みも白さく、大神等の高く尊き大御徳を慕奉り仰

奉りて、弥遠永に齋き奉らむと、此の代々木の原を朝日の日照る所夕日の輝く所と、底つ岩根に宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて、瑞の御殿仕奉れるを以て、今日の生日の足日に御使差遣されて、御霊代を坐奉り鎮奉り、宇豆の大幣帛を捧奉らしめ給ふが故に、大前に齋まはり清まはりて献奉る御食御酒、種々の物を平けく安けく聞食して、今より往先、此の大宮を静宮の常宮と長久に鎮座せと、恐み恐みも曰す

次勅使随員、御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ宮司ニ渡ス」

〔明治神宮祭典記録〕、卷二

「かくて今日より後、大御霊はこの大宮の静宮に長久に鎮りまして、国民諸が朝な夕なに参集ひ来て、慕ひ敬ひ尊み齋き奉る大御神ともなり給ひぬるぞ、かたじけなき。」

〔明治神宮鎮座絵詞〕第二十、鎮座祭ノ四

「此の今日の吉き日に、国民の追慕一日として止まざる我が 明治天皇・昭憲皇太后二柱の大神は、新らしき国の護と仰がれ給ひて、永久に安けく此の代々木の大宮に鎮座すこととはなりぬ。」

〔明治神宮記録〕卷一、十一月一日

「 鎮座祭の人出五十七

明治天皇・昭憲皇太后の御霊代を奉遷して崇厳の御儀を挙げ、全市を飾る玉燈の影、軒より軒へ彩旗ごとごとく万戸を埋め、参拝の群衆は御苑を埋めて、雑踏混乱、名状すべからず。」

〔東京朝日新聞〕、十一月二日付

二日 午前九時過ぎ、御名代（東宮殿下）の御参拝。その儀、まず床次副総裁以下の造営局員が参集し、八時二十分に二条宮司以下の神職が参進。宮司・権宮司が開扉、禰宜以下が神饌奉奠、宮司の祝詞奏上にて滞りなく祭儀を終えた。

九時前、國務大臣・枢密院顧問官・陸海軍大将・親任官など、何れも大礼服にて隔雲亭前（旧御殿内）の休憩所に入る。旧御殿には伏見・閑院・山階、梨本・北白川の宮殿下が参集。東宮殿下は宮城を経て、九時五十五分に儀杖兵の居並ぶ便殿に着御。権宮司の先導にて本殿木階下の御拝座に着き、宮司の進める御玉串を受けて、謹んで御拝礼。小憩の後、還啓。続いて各宮殿下・宮司・参列員が玉串拝礼。禰宜の神饌撤下、宮司・権宮司が開扉して終える。

午後より一般参拝を許可したが、昨日の反省にたつて授与所は当分のあいだ閉鎖し、三神門の出入りを制限して南御門から入り、東西二門から退出させ、混雑が緩和された。参拝者三十万。

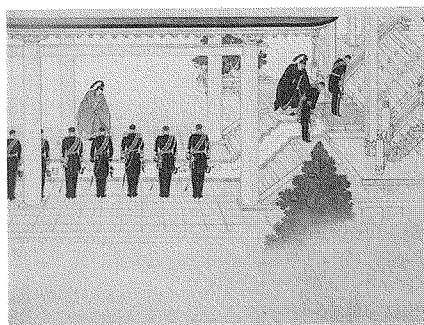


図 10

〔図10〕(絵詞五、第三二二五・御名代宮御参拝)

聖上(大正天皇)の御名代として東宮(昭和天皇)が御参拝。夜来の雨もあがり、午前八時二十分、高輪の東宮御所より公式鹵簿にて参内。聖上に御挨拶。ふたたび神宮に向かわせられ、神宮橋・南参道を経て十時頃、便殿御車寄に御到着。権宮司の先導、浜尾東宮大夫・入江東宮侍従長・奈良東宮武官長の扈從にて御参進。手水・修祓があり、皇族・王族は本殿石階下に止立。御名代は同木階下の浜床上に進まれた。

宮司の進める御玉串を執り、謹んで御拝礼。宮司は御玉串を受けて、大床の案上に奉奠するや、御名代が退下。ふたたび便殿にて小憩の後、還啓の途に就かれた。なお三日は初度の御例祭として、勅使参向・幣帛奉納の儀がとり行なわれた。

「東京府内務部長より宮司宛にて、来る二日皇后陛下御参拝取止めの件、同日天皇陛下御名代として皇太子殿下御参拝の件、三日例祭日に勅使参向の件通牒。」

〔明治神宮記録〕巻一、十月三十一日

三日 「永遠に最も意義ある国家的・国民的な大記念日」と讃えられる初度例祭。阿部東京府知事以下が拝殿に進むや、勅使・河鑄掌典が御幣辛櫃を捧げて参進し、宮司・権宮司が開扉、禰宜以下の献饌、宮司の祝詞奏上。幣物奉奠、府知事・宮司の玉串拝礼、撒饌、閉扉、退下と続いた。なお、これまで造宮局が祭儀執行に当たってきたが、本日より社務所が主として執行することになった。

「十一月三日は明治の御代の天長節として、七千万赤子の脳裏深く刻まれ、忘れんとしても忘れ難き日如何にもして此の吉き日を記念し奉らんとは、誰も誰もの願なりき。聖旨長くも遂に此の日を以て、当神宮の例祭日と定め給ひ、勅使を御差遣、幣物を奠めさせ給ふこととはなれり。」

〔明治神宮祭典記録〕巻二

「昨二日迄の祭典は、造宮局の手によりて行はれたるが、今日の例祭よりは社務所が主として、之に当ることとなる。」

〔明治神宮記録〕巻一、十一月二日

四日 午前六時より一般参拝を許可。直会殿・外院東廻廊に仮授与所を再開し、また宿衛舎当番にて朝夕二回の日供奉仕を始め
る。全国司法官・神宮皇学館生が参拝。

五日 東京府外の七具連合宮司会を旧御殿で開催。午前六時より午後五時まで参拝時間のうち、仮授与所が混雑をさわめ、絵葉
書・守札も払底。星野掌典補が付き添い、内掌典たち参拝。

六日 内田信保（顧問）・原田耕一（守衛主任）拜命。日本歌道奨励会、献詠一、六五七首。

七日 鎮座後、初度の日曜日を迎え、実に参拝一五三、〇〇〇人を数える。

八日 神谷鑄太郎以下二十名（守衛）・松尾捨次郎（小使）拜命。

九日 天皇陛下の御参拝につき、宮内省より公式通知。近日常幸啓を控えて、同省下検分を実施。本日より宿衛所にて神符・守
札を授与し、仮授与所を閉鎖。

一〇日 宮司以下、正午より参籠。午後五時より祭典準備、夜分に習礼を行なう。

十一日 天皇陛下の御参拝。御名代の参拝に比べて、本殿木階下の御浜床における御拝礼位置は変わらない。ただし御玉串の授受
が聖上の場合、宮司↓侍従↓聖上となるが、東宮の場合は宮司↓東宮とより簡略である。

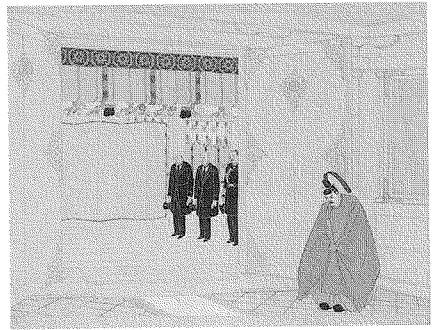


図 11

〔図11〕(絵詞五、第二六・聖上御参拝)

前夜参籠の宮司以下(衣冠)は、十一月十一日午前八時二十分より祭儀を済ませ、細雨のなか「現御神の初度の行幸」とて、聖上(大正天皇)の着御をお待ちする。九時、聖上(陸軍式通常服、菊花章佩用)・正親町侍従長(陪乗)・原侍従以下(供奉)は式外鹵簿にて出門。神宮橋・南参道の順路で便殿に着御。権宮司の先導にて進御、手水・修祓があり、本殿木階下の御浜床に止立。宮司から侍従を経て聖上に御玉串を進めて御拝礼。宮司が大床の案上に御玉串を奉奠して終わる。この後、聖上には便殿にて小憩、天機うるわしく還幸になられた。

「をりしも降りしきる細雨は、林苑より神殿のあたりまで、さながらに洗い清めてひとしほの神々しさを増し、御垣の内に敷きつめられたる玉砂利はいよいよ白く、木々の紅葉も色を深めて、現御神の初度の行幸を待ちがほなり。」

〔明治神宮鎮座絵詞〕第二六、聖上御参拝)

「掛まくも畏き明治神宮の大前に宮司正・位懸二等功五級公爵一奉実輝 恐み恐みも白さく、天の下津々浦々の国民に至るまで、二柱尊の高く広き大稜威を仰奉り慕奉る念一日として止む事無く、大宮地定まりてより六年の間、其道々の人等、夜と無く日と無く勤み仕奉りて、此の大御殿も悉に作畢へ大神等、大朝廷の固め皇御国の護と長久に鎮坐しぬれば、天皇命痛く嬉み深く喜ばせ給ひて、今日の生日の足日の朝日の豊栄登に、親しく大前に参出て拝奉らせ給ふが故に、齋まはり清まはりて献る豊御饌豊御酒、海山河野種々の物を平けく安けく聞食して、天皇命の大御代を嚴御代の足御代と、堅磐に常磐に齋奉り手長の御代と幸奉給へと、恐み恐みも白す」

〔明治神宮祭典記録〕卷三、天皇陛下御参拝式祝詞)

「 天皇陛下御参拝式

大正九年十一月十一日

次進御 掖門ノ辺ヨリ中庭ヲ経、中門内ニ進御、権宮司御先導、侍従長・侍従武官扈從、内務次官・神社局長・東京府

知事供奉ス

次御拝礼

宮司玉串ヲ執リテ侍従ニ伝フ、侍従之ヲ奉ルヲ執ラセ給ヒテ御拝礼、訖リテ之ヲ侍従ニ授ケ給フ、宮司之ヲ受ケテ大床ノ案上ニ奉奠ス、此間、内務次官・神社局長・東京府知事、中門内ニ侍立」

〔明治神宮祭典記録〕卷三

一三日 午前九時、伏見宮殿下御参拝。南玉垣鳥居前で御下乗、権宮司の先導、直会殿の修祓、中門内の皇族拝座が慣例となる。

一四日 日曜日とて参拝五万。宮司以下は正午より参籠し、明日の諸準備を行なう。

一五日 皇后陛下の御参拝。

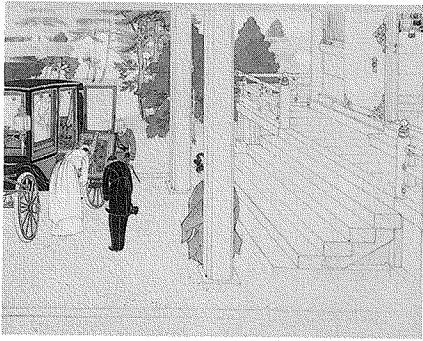
「国民上下も等しく、両陛下がかくまでに大孝の誠を申べ、敬神の実を示させ給ふを見聞き奉りては、いとど忠愛の念に燃え孝貞の情を尽さむと、競はぬものこそなかりけれ。」

〔図12〕絵詞五、第二七・皇后宮御参拝

〔明治神宮鎮座絵詞〕第二七、皇后宮御参拝

午前九時、皇后宮（貞明皇后）、正親町権典侍（陪乗）・柳原二位局・大森皇后宮太夫（供奉）は式外有蓋函簿にて出発、各宮妃殿下の奉迎する便殿に御到着。旧御殿で小憩。権宮司の先導、女官の手水、禰宜・主典の修祓、御参拝は聖上の如し。とりわけ参拝後、皇后には拝殿周辺を巡覧・下問。西参道より急御苑に赴かれ、一時に還啓された。

図 12



一七日 全景図調製のため大光社の松岡、画工夏雲が来宮。

一八日 久邇宮兩殿下・朝香宮殿下御参拝、柴（五郎）台湾軍司令官正式参拝。

一九日 造営局祭儀部より浜床など、祭器具を引き継ぐ。午後、英国大使エリオット参拝。

二二日 代々幡町長、新嘗祭用の新穀献納。大木禰宜、新嘗祭式につき東京府と、また内務省考証課と御衣更の件を打合せ。

二三日 新嘗祭にさきだち、(鎮座以来の雑踏のため本日) 立冬に執行すべき御衣祭を奉仕。御衣を取り替えるや、新嘗祭に移り幣帛供進使・阿部東京府知事を迎えて、祭儀を滞りなく終える。引き続き全国青年団の代表者六四〇七名が参拝。引率者五〇名、代表団体一六、〇〇一団(総団員二、七九六、二二八名)に及ぶ。

「明治神宮は、全国民至誠の結晶によりて成れるものなるが、就中青年団とは最も密接なる関係あり。抑々御造営工事開始の後、各地青年団員、先を争ひて労力奉仕に預らむことを冀ひ、又鎮座当日、東京はもとより全国津々浦々の青年団員、獻身的努力を捧げたるが如きは、殆く人の知るところなり。今や御造営も全く成り、二柱の神霊目出度鎮りましぬるを以て、内務・文部両省主催にて全国各郡市青年団より代表者宅名宛を選抜し、本日の佳辰に参拝せしむることとせり。」

〔明治神宮記録〕第一、十一、一三三日)

二六日 大木禰宜、鎮座祭当時の警衛につき、警視庁と謝儀を協議。

二八日 東京市連合青年団五千余名が参拝。

三〇日 熱田神宮庁に奉製依頼した守札五万枚、本日到着。社入金は総計七一、九五九円四六銭に達する。

○ 十二月

一日 初度の月次祭奉仕。「朔日詣」の参拝者すこぶる多く、先帝御乳母・旧女官の伏屋守子も正式参拝。

五日 増田装束店に宮司以下の齋服を発注。

七日 降雪のなか、参拝者五百を数える。

八日 佐賀県青年団の奉仕始。祓舎の修祓、拜殿階下に整理、禰宜の奉告祝詞が、今後の慣例となる。

二二日 本日より朝御饗を、前日の社務所宿直者が奉仕すべきものと改める。

一六日 群馬県佐波郡の連合青年団二、七〇〇余名、安間郡長の引率により十五日・十六日に参拝。

二二日 公爵・山県有朋、正式参拝。

- 二二日 高松宮・華頂宮両殿下（海軍兵学校在学中）、冬期休暇中につき御参拝。
- 二四日 澄宮殿下、初めての御参拝。
- 二六日 帰省学生、新入官兵が多く参拝。
- 二八日 熊本県菊地郡津田村民、「天恩拝謝、国運隆昌」を祈願するため、精白米を奉納。
- 三〇日 禰宜以下の職員一同、本殿はじめ殿舎を大掃除。元日御饌として各宮家より大鏡餅を奉納。
- 三一日 降雪のなか午後二時より大祓執行、四時過ぎより除夜祭奉仕。歳旦祭につき一条宮司以下、参籠潔斎。